

豊富なビジュアルと資料によって、毎号1機のMSを多角的に解説!

# GUNDAM MS Bible

THE OFFICIAL

Mobile  
Suit

ガンダム・モビルスーツ・バイブル

RX-77/ガンキャノン



35

2020.2.4 2.11 合併号

## ガンキャノン GUNCANNON



Total Height : 17.5m  
Weight : 51.0t  
Total Weight : 70.0t  
Material : Luna Titanium Alloy  
Generator Output : 1,380kW  
Thrusters Total Propulsion : 51,800kg



ガンダムの活躍を後方から支え続けた支援砲撃用MS



## GUNCANNON

## ガンキャノン

地球連邦軍が実施したMS開発計画（RX計画／V作戦）によって誕生した中距離支援用MS。

前衛で格闘戦を行う友軍機への後方からの支援砲撃をコンセプトとしており、  
両肩に装備された240mm低反動キャノン砲は対地／対空どちらの標的にも使用可能。

ちなみに一年戦争当時、支援用MSという概念は存在していなかったが、  
ガンキャノンの出現以降、連邦軍だけでなくジオン公国軍でも同コンセプトの機体が誕生した。



## スペック

全高	17.5m
全重量	51.0t
構造重量	70.0t
材料	ルナ・チタニウム合金
出力	1,380kW
重量	51,800kg
有効射程	6,000m
武装	240mm低反動キャノン砲×2 ビームライフル×1 頭部60mmバルカン砲×2 ハンドグレナード スプレー・ミサイルランチャー×2（計画のみ）
パイロット	カイ・シデン ハヤト・コバヤシ 他

# GUNDAM

## MS Aible 35

## CONTENTS

■ 戦場レポート セイラ、出撃	01	■ MS戦記 ガンキャノン 戦時の記録	20
■ MS機体解析 機体解説 武装解説 機体バリエーション	05 08 10	■ MS進化論 ガンキャノン 開発系譜図	22
■ 関連MSラインナップ ガンキャノンと関連機体	16	■ メカニック・ジャーナル 支援用MS	28
■ MSパイロット カイ・シデンと関連人物	18	■ ガンプラ ジェネレーション 有名な砲撃シーンも再現可能！	34







『機動戦士ガンダムII 哀・戦士編』

# セイラ、出撃

## 運用MS 地球連邦軍／ホワイトベース

シミュレーションで操縦方法をマスターしたと満腹するセイラがガンダムで出撃。しかし実戦に即応できるはずもなく、ザクⅡ型に捕獲されそうになる。その窮地を救ったのはアムロが活躍するガンキャノンだった。



WHITE BASE  
ホワイトベース



RX-78 GUNTANK  
ガンタンク



RX-78-2 GUNDAM  
ガンダム



RX-77 GUNCANNON  
ガンキャノン

アムロが模倣したせいもあってか  
通常よりも優れた機敏性を発揮し、グブを圧倒している。

VS

ガンダム



中央アジアの砂漠地帯を横断していたホワイトベースが、接近して陸戦艇らしき機體を発見。これをジオン公国軍の襲撃と判断したブライト・ノアは、ガンダム以下のMS隊に出撃準備命令を下した。ところが命令に反して、ガンダムだけがホワイトベースから発進してしまう。

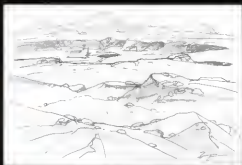
パイロットはアムロ・レイやブライトに無断で搭乗したセイラ・マスである。

生き別れになった兄(シャア・アズナブル/キャスバル・レム・ダイクン)の消息を気に掛けていたセイラは、公国軍パイロットから情報を得ようとするあまり、無謀な行動に出たのだった。

## 戦闘地域

アジア地区沿岸でランバ・ラル隊と交戦したホワイトベースはユーラシア大陸を西へ移動しつつ、地球連邦軍基地ジャブローへ向かっていた。その途中で通りかかったのが中央アジアの砂漠地帯だ。ちなみにこの戦闘の地、ホワイトベースは連邦軍伝令兵と接触。ヨーロッパ地区における一大反乱作戦(オデッサ作戦)への参加命令と作戦の確切日時を伝達されたといわれる。ただしこの時期の戦史には混乱した記述が多く、これを異説と見る向きもある。

この地域に存在するのは延々と続く砂の海とところどころから突き出した岩山くらい。緑地帯も少なく、ホワイトベースでは糧不足に陥ったともいわれている。



■中央アジアに広がる砂漠地帯の荒涼とした風景



MS-07B GOUF  
グフ

と並ぶガンキャノンの支隊部隊に派遣を要まれ、部下(コズン)が幹部になってしまう。



MS-06J ZAKU II TYPE J  
(ACOUS USE)  
ザクII J部(アコス部)



MS-06J ZAKU II TYPE J  
(COZUN USE)  
ザクII J部(コズン部)

## 運用MS ジオン公国軍/ランバ・ラル隊

ギャロップとMS隊(グフ、ザクII型)による二方向からの攻撃を遂行。ギャロップがホワイトベースの注意を引いている間にMS隊が強襲を仕掛けるはずだった。だがコズン機が盗襲されたことで後進を余蘊なくさせている。



GALLOP  
ギャロップ(高速機部隊)

## HISTORY TIMELINE — 物語の展開 —

### ■増長の果ての脱走劇

西進を続けるホワイトベースは公国軍偵察基地を発見。無駄な戦闘の回避を図るブライトに対してアムロは先制攻撃を主張。ガンタンクで出撃したもののがランバ・ラル隊を呼び寄せる引き金となってしまう。アムロの増長を心配したブライトは、彼をガンダムから隔るべきだと考えるのだが……。

戦闘の最中、機庫から脱出したコズンは連邦軍基地を占拠してホワイトベースの内部をランバ・ラル隊に報告。ただし機庫には失敗している。



偶然、ふたりの会話を耳にしてしまったアムロは激しく動揺。ガンダムとともにホワイトベースを脱出すると、行方をくらませている。



ランバ・ラル隊を追い詰めたものの今後は要慮したブライトは、アムロをガンダムから離らすつもりだとミライ・ヤシマに確認した。

# MS 機体解析



RX-77 GUNCANNON  
ガンキャノン

## 「V作戦」に基づいて 地球連邦軍が開発した 中距離支援用MS

「RX計画」から発展した地球連邦軍の「V作戦」は、MSを組み込んだ戦術システムの確立を命題のひとつとし、設計思想が異なる複数機種をMSを並行して開発することでMSの運用形態を模索した。その一端で中距離支援用MSの開発が進められ、RXシリーズのひとつとして完成に至る。それがRX-77 ガンキャノンという機体であった。

ガンキャノンはRX-75 ガンタンクに続くRXシリーズMSで、MSとしては不完全なガンタンクの問題点を解消すべく開発された。その設計は人間同様の四肢を持つMS本来の機能を満たし、中距離支援を想定した火力と重装甲が付与されている。そして、ホワイトベース隊による運用で性能を実証したのだった。



両肩に装備したキャノン砲の火力によって敵機を支援するという運用を想定した機体で、以降のMS開発にも大きな影響を与えた。



ほかのRXシリーズMSとともにホワイトベース隊で運用され、一年戦争末期には遠征のガンキャノンが戦場で活躍を続けた。

### 機体比較



機体高は18m超と当時の標準的な水準だが、機体重量はガンダムよりもやや重い。それでもザクなどのジオン公団専用MSよりも軽く、ルナ・テナニウム合金の採用によって機体重量の低減と燃費性の向上を両立している。



RX-77  
GUNCANNON  
front view



簡スケール  
パイロットとの対比



# MS 機体解析 機体解説

## 砲撃戦に対応したガンキャノンの機体構造と コア・ブロック・システムの採用による弊害

較に知られるガンキャノンはRX 77-2の型式番号を有し、本誌の2は初期試作機(RX 77-1)に続いて開発された先行型仕様を意味する。また、本機には地球連邦軍内で開発されていた「足歩行のテストタイプ」ロボット「RMM-1」のデータが反映されており、連邦軍によるMSへの基礎研究の成果が投入されていた。

一方で、前述のコア・ブロック・システムを採用したことにより生産性は低下し、本機はザクIIの1倍という膨大な生産コストを要していた。そのため、戦力化には設計の簡易化が必要となっていたのである。

### ■頭部

頭部はハイサーで覆われたメインカメラを特徴とする。これはモノセンサー方式と呼ばれる構造で、ガンダムデュアルセンサー方式よりも生産工程が簡略化できるという利点があった。ただし、本機のセンサー系は砲撃戦仕様のためにガンダムよりも増強化されていたといわれる。なお、本機のセンサー構造はツインアイとしてRGM-79 シムに受け継がれている。



後頭部に2基のロケット状アンテナを備え、内部には火器管制用コア・プロセスシステムを搭載していたという。



同じRXシリーズMSのガンダムに比べると、頭部は割立つほどの膨大化が行われている。

### ■胴体

胴体 特に上半身は内部スペースの多くがキャノンの砲撃機構に割かれており、そのために可動機構は比較的低劣なものとされる。一方、ルナチタニウム合金製の複層装甲は非常に堅牢で、ノオン公国軍系MSの5〜6倍の強度を誇ったといわれている。ちなみにこの複層装甲はルナツーで採掘されたものを元にしていたという。



胴体装甲は鋼鉄の複層の連結構造で、そこに衝撃を受けてコウビットに衝撃が及ぶケースもあった。



側面から見たガンキャノンの胴体形状。胴体のサイズは一般的なMSと照準のバランスに取られている。

### ■ランドセル

背部のランドセルは2基の円筒状ユニットを組み合わせた構造で、側面にキャノン砲の排気口を配している。機体重量もあって機動性は決して高くはなかったが、ザクIIなどの公国軍MSに劣るものではなく、対峙した公国軍パイロットが「キャノンであるスピードなのか」と驚愕する場面もあったという。



ランドセルのスラスター 推力は、機動性よりも重力下でのジャンプ動作を可能とした。



ランドセルや足部のスラスター以外に、機体各部に必要に応じてバーニアを備えていたとみられる。



円筒状ユニットの上部に位置するものがキャノンの排気口で、下方にスラスターノズルを備える。

MS-77  
GUNCANNON  
Base Model

## ■脚部

本機は脚体部に腕部の可動機構を設けられなかった関係上、脚部にその太手を配置していたといわれる。また、ミニヒューレータはカンタムのもものと同等の機能を有するか、反応速度よりも出力を重視した調整が施されていた。



MSを片腕で創造する出力を誇る一方、スラップキックを備わずに機石繊細な操作性も有していた。



## ■脚部

脚部はカンタムのものに比べて太く、射撃時の安定性を重視すると同時に、機動性の低さを装甲で補おうとした設計思想が表れている。また、足裏には4連装のノズル2基を備え、ラントセルのスラスタと共に推力を担っている。



機動性に優れたMSではないが、地上での走破性も決して低くはなく、真鍮に耐える性能を示した。



## ■運用

ガンキャノンの先行型仕様は6機が生産され、うち3機がサイト7での慣熟テストに回された。たが、U.C.0079.09.18に発生したジオン公国軍の襲撃によって被害を受け、破壊を受けた1機がホワイトヘースに回収された。その機体はガイ・インテンの乗機として運用され、のちに1機が追加配備されて「C-108」「C-109」の機体番号が与えられることになる。C-109にはハイアト・コハヤンが搭乗し、一年戦争の終戦まで活躍を続けのたつた。



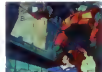
ア・バオア・クー戦ではホワイトヘースの召喚のほか、「C-103」の機体番号が与えられた機体も確認された。



一年戦争後、ケネディ・スーパースポーツの宇宙博物館では「C-108」のレプリカが展示されていた。

## ■コア・ブロック・システム

RX-77シリーズ MSである本機は、コア・ブロック・システムを採用している。コア・ブロックシステムへの変形機能を有する小型戦闘機「FF-X7 コア・ファイター」を中核モジュールとする同システムは、パイロットと教育型コンピュータの保護と回収を目的とする。ただし、本機においてその脱出機構が効果的に用いられるケースはなかったようだ。



コア・ブロック機中のガンキャノン・空中降参が付けられたケースなどは確認されていない。



## MORE INFO

### 中距離支援用MSの系譜

ガンキャノンに代表される支援用MSは、一年戦争中に連邦軍・公国軍の双方で複数機種が開発された。それらは実戦で一定の効果を挙げたものの、技術の進展によってMSの万能性が高まるにつれて姿を消していった。一方で、オプション装備の機体によってその役割を持たせるといった手法も残ったのだった。



RGM-96X ジェスタの重砲仕様であるジェスタ・キャノン。遠距離戦による高威力射撃能力を有する。



MS-06K ザクキャノン。公国軍が中距離支援用に開発したザクのバリエーション機。



RGC-80 ジム・キャノン。ガンキャノンの簡易型を基盤として開発された連邦軍の支援用MS。



RGC-83 ジム・キャノンII。ガンキャノン系列の完成形とも呼ばれるジム・キャノンの発展機。

復讐した公敵機MS（ザクII型）をホワイトヘースまで引き寄せるガンキャノン。機動性に劣るとはいえ、スラッパ・出力はガンダムと同程度あり、パワーは十分だった。

# MS機体解析 武装解説

## MSとしての機能を保ちつつ火力を付与した ガンキャノンの固定兵装とオプション装備

砲撃支援のための固定兵装として大型火器を外装するという設計は、ガンタンクの時点で発案されていたものだった。ガンキャノンにおいてはそれにさらなる改良を施し、MSとしての機能を大きく損なうことなく中距離支援に適した火力を付与している。また、固定兵装のプラットフォームとなる肩部の火器ターレットは、頭部センサー等からのデータに基づいて目標の自動追尾とロックオンを可能としており、パイロットにかかる火器管制の負担を軽減する設計がなされていた。それらの構造により、本機は支援用MSとして優れた戦闘力を獲得していた。



砲撃には砲撃が有効なシチュエーションを捉え、その瞬間によってザク・マシガンと同等の追従性能を併用した。



主砲であるガンキャノン砲は、固定砲撃などにも使用された。



頭部センサーと照準装置で目標をロックしたとされるが、実際にはガンキャノンの砲撃機構がターゲットをロックする仕組みであった。この仕組みが、ガンキャノンの特徴となっていた。

ガンキャノンを搭載した機体には、ランダムに上部のセンサーから発射される砲撃の砲撃が誘引される機構となっている。

### ■キャノン砲

肩部長銃ターレットに、2基が装備された本機の主兵装で、低弾性の高威力と機体ハイスへの影響を鑑みて低反動の実弾弾薬が採用された。口径は240mm・360mmとする説もあるが、「240mm低反動キャノン砲」と呼ばれる場合もある。ガンタンクの120mm低反動キャノン砲に比べ、大口径・短筒で有効射程は短かっただけで、連射性能が非常に高く、威力下での弾道調整も可能だったという。また、弾薬が尽きたガンタンクとは異なり、炸薬用弾薬を備えて弾薬を撃ち出す方式だったとする説もあり、それによれば弾薬は上半身・下半身に搭載されていたといわれる。弾薬や弾薬庫を備えた安定した火力を発揮し、本機の砲撃支援能力を支えた。

ちなみに本機のようにキャノン砲を搭載した中距離支援MSはメカニクス公国軍には存在しておらず、本機との遭遇も、同様のコンセプトの機体開発が進められたとの説がある。一年戦争は多種多様なMSの開発とテストの場でもあり、このような現象が発生してもおかしくはない。



キャノン砲は本機の火力の大きな比重を占めた。射撃距離は優勢を継いで対戦艦を小さくする戦術が採られたか、遠距離で用いるケースもあった。

### ■ビーム・ライフル

本機開発中に開発されたヒーム・ライフルは、ホウワ社製の「XBR-M75a」とされる。デハイスにはXBR-Lタイプが用いられており、ガンダムに採用されたXBR-Mタイプと比較すると取り回しの悪さはあったものの、照準精度や射撃に優れていたという（射撃はガンダムのもので同程度だったとする説もある）。また、本機は当初ヒーム兵器の装備を予定していなかったが、ガンダムが完成したのちにルナツーで熱核反応炉の改造を受け、ヒーム・ライフルが使用可能となったといわれている。なお、ホウワ・ヘス隊による本機の運用においては、弾薬が尽きたため、ヒーム・ライフルの運用は確認されていない。



射撃距離は30kmほどで、爆撃に特化した機能を有していたといわれる。一方で遠距離に用いられたとする資料もあり、幅広い適用性を獲得している。



ビーム・ライフルを握るガンキャノン。左手に持っているのはハンド・グレナードだ。



ガンダムが搭載するビーム・ライフルとハンド・グレナードは、グリップ・ガードがフォアグリップを兼ねる。



スプレー・ミサイル・ランチャーを折り出した状態。折り付けの軌道はキャノン砲と似たとされる。



上はスプレー・ミサイル・ランチャーのユニコト。内蔵のランチャー先端に発射口を備える。内部が露出していないことも、開発秘話として知られる。



中機はオパール・ドッグの機体に取り付けられ、敵部隊にマニピュレーターで取り出して発射する。



本機は中機に搭載され、ビーム・ライフルの威力も発揮された。そのため、敵機に接近しやすくなり、戦況にも有利なケースもあった。



側面バルカン砲やレイアウトガンダムやガンダムと異なり、この機体の左右に発射口が設けられている。

## ■スプレー・ミサイル・ランチャー

最初火器ターレットに装備可能なオプション兵装で、「12連装ロケット弾ゴルト」とも呼ばれる「ミノフスキー粒子散布下」では実用的な命中精度を期待できなかったため、機体の展開を想定した近接戦闘用の装備として設計されていた。ただし、実戦での運用は極めておろそか、ホワイトベース隊でも使用されていなかった。試作段階まで開発が進められたものの、実用化はされなかったともいわれている。



サイト7で展開された機体のなかに、スプレー・ミサイル・ランチャーを展開した機体もあったといわれる。



公開前の試作機、キャノン砲とハンド・グレナードは搭載されたが、そのなかに本機はあられなかった。

## ■頭部バルカン砲 ハンド・グレナード

頭部には80mm口径のバルカン砲2基を内蔵しており、対空迎撃や近接防衛に用いられた。また、オプション兵装のひとつとしてハンド・グレナード（手榴弾）が用意されており、ア・ハオア・クで防衛での使用が確認されている。これは機体攻撃時の施設破壊などに用いられた装置で、マニピュレーターで投擲した、弾体が弾かれたバーニアで軌道を修正しながら目標に、当たっていくというものであった。



頭部バルカン砲を有するガンキャノン。頭部の砲口を許すケースはあまりなく、用いられた例も少ない。



手榴弾はア・ハオア・クで機体に取り付けられたカブからポイントのメインゲートに突入する際に用いた。

## 実戦で示された白兵戦能力

中機標準用MSとして開発された本機は白兵戦を想定せず、それに対応した兵装も持たなかった。だが、ホワイトベース隊での運用においては、アムロ・レイが爆撃した際にサックを文字通りの「格闘戦」で行動不能に追い込む場面もみられた。一方で、機動性と白兵戦能力の向上を回った系列機の開発も試みられ、RX-77-3D ガンキャノン 重装型（タイプD）の完成に至っている。



サックの機体を機体に取り付けるガンキャノン。簡単な機体構造は機体にも有利に働いた。



出力は公開前のMSを凌駕しており、パイロットの指揮次第では接近戦でも有利に戦えることもあった。

# MS 機体解析 機体バリエーション



## RX-77-1A GUNCANNON A ガンキャノンA

### ガンキャノンの謎多き初期試作型 「I」仕様の「A」タイプ

RX-77-1A ガンキャノンAは、一般にガンキャノンとして知られるRX-77-1の前段階にあたる初期試作型RX-77-1の派生タイプとされる。RX-77-1に関しては月面的な情報が多量になく実態が不明だが、ガンキャノンAはガンキャノンの機動性維持と重装甲化を模索していた。ガンキャノンとはほぼ同じ構造とカタログスペックを実現しており、相違点は装甲形状や兵装の一部にとどまる。なお、ガンキャノンタイプMSでセーム・ライフルが搭載されたのは、ガンキャノンAが最初（型式番号順では）と考えていいだろう。



兵装面におけるRX-77-2との相違点は、腰部左側の3連装ミサイル・モットの搭載と腰部の未搭載であった。



サイト7で機体テストに供されたが、サイト7は実験場で失われたといわれる。同実験場の地盤は不安定である。



RX-77-1A  
GUNCANNON A  
Rear view



RX-77-1A  
GUNCANNON A  
Front view

#### ■頭部



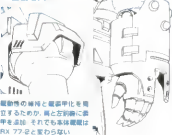
カメラアイのガラスカバーが大面積であるが、従来機ではRX-77-2と同じく2門の60mmバルカン砲も際に搭載されていた。

#### ■武装



キャノン砲の砲口から機体の二機銃道が見て取れる。外側は通常のサマーンスラフ（常設シャット）と思われる。

#### ■各部装甲



機動性の維持と重装甲化を両立するため、肩と右腕部に装甲を追加。それでも本体重量はRX-77-2と変わらない。

#### ■ランドセル



装甲板の位置などがわずかに異なるが、RX-77-2と機体の基本構造を有する。キャノン砲の給弾機構も備えるようだ。

### SPEC

全高: 17.5m 本体重量: 51.0t 全備重量: 72.0t  
装甲材質: ルナ・チタニウム合金  
ジェネレーター出力: 1,380kW  
スラスター総威力: 51,800kg  
武装: 60mmバルカン砲×2、キャノン砲×2、3連装ミサイル・ダネル×1、セーム・ライフル×1

#### ■機体比較



RX-77-2 GUNCANNON	RX-77-1A GUNCANNON A
17.5m	17.5m

機体統一されていたためか、全備重量以外はRX-77-2とまったく同一のスペック。センサー有効半径も6,000mで変わらない。全備重量の違いは、3連装ミサイル・ポッドの搭載による影響が大きいようだ。

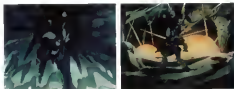


RX-77-3 GUNCANNON HEAVY CUSTOM

## ガンキャノン重装型

### 同型機による部隊編制を想定した ガンキャノン第「3」仕様機

ガンキャノンのバリエーションのひとつで、単機または同型機のみによる部隊編制を想定したMSがRX-77-3 ガンキャノン重装型である。RGC-80 ジム・キャノンの昇格と同時並行的に推進された、重装型MS計画において開発・完成に至った。開発に際しては、RX-77-2の開発段階から問題視されていたキャノン砲発射時の反動の軽減を模索しつつ、装甲と火器の性能向上が図られている。重量増加を受けてスラスター推力も強化されたが、実際の機動性は想定を下回り、少数が量産されるにとどまった。



一年戦争終結後も配備が継続した機体は、全天候モニターへの換装などがなされ、ジャブロー配備となった。

#### ■頭部



RX-77-2を基盤、兵装の強化や砲撃機との連携にともない、射撃センサーや追従センサーは改修されたようだ。

#### ■ランドセル



原型機で左右に分置されたランドセルは一併型に集約。パイロッドの拡大は、これによる重量増が大きい模様。

#### ■武装



ランドセルの砲システムとともに強化されたキャノン砲。速射性と総弾数はRX-77-2の2倍で、強い攻撃力を果たす。



RX-77-3  
GUNCANNON  
HEAVY CUSTOM  
Rear view



ガンキャノン用と見られる、ビーム・キャノンおよび多弾射撃型砲システムに換装することもできた。



RX-77-3  
GUNCANNON  
HEAVY CUSTOM  
Front view

### SPEC

全高:17.5m 本体重量:58.6t 全備重量:72.1t  
装甲材質:ルナ・タタウム合金  
ジェネレーター出力:1,380kW  
スラスター総推力:62,200kg  
駆動:顔部(バルカン砲×2、キャノン砲×2、ハンドブレード、ビーム・ライフル×1)

#### ■機体比較



RX-77-2  
GUNCANNON  
17.5m

RX-77-3  
GUNCANNON  
HEAVY CUSTOM  
17.5m

原型機から大型化することなく攻撃力を強化。生産性向上のため角型・鋭角型は角型とされている。本機をベースに、バーニアスラスターなどを追加したRX-77-3D ガンキャノン重装型(タイプD)が開発された。

# MS 機体解析 機体バリエーション



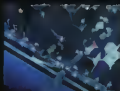
RX-77D MASS-PRO TYPE GUNCANNON

量産型ガンキャノン

## 生産性の向上に主眼を置き 一年戦争末期に完成した ガンキャノンの量産仕様機

RX-77D 量産型ガンキャノンは、一年戦争末期に開発されたガンキャノンの量産機である。機体名称は「ガンキャノン量産型」「ガンキャノン量産検討機」と諸説あり、本格量産に先駆けてその検討のために急遽製造された機体といわれている。原型となったのは3型(RX-77-3 ガンキャノン重装型を指すと考えられる)とされ、コストダウンに主眼を置いた仕様変更と改良が施されている。

開発が戦争末期だったこともあって実戦投入された機体は少なく、強襲揚陸艦(グレイファントム)所属のスカレット隊への配備例が知られている。しかし、同部隊による実戦運用では期待された戦果を挙げられず、一説にはその結果を受けた軍部が少数の上位機種による編制計画を放棄し、RGCシリーズへの注力に方針を転換したともいわれている。



コロニー内に降下するスカレット隊のMS。2機のRX-77Dとジム・スナイパーIIの間に、量産型ガンキャノンの機体が見える。



サイド8のりぼーコロニーで発生したジオン攻撃軍MSとの戦闘では、敵機への落下やを助けて損害を受け、おぼろげに破壊されている。

### 機体比較



機体サイズや全体的なフォルムはガンキャノンのそれをほぼ踏襲している。機体色も赤系でガンキャノンと似ているが、運用環境によって迷彩カラーリングを施する例もあったという。



RX-77D  
MASS-PRO TYPE  
GUNCANNON  
Front view

### SPEC

全高 17.5m 全長 10.0m 本体重量 510t 全備重量  
標準時速 72km/h ミサイル 30発  
ジェネレーター出力 1,410kW  
スラスター総出力 93,500kg  
武装 腕部バルカン砲×2 キャンオン砲×2



グレイファントムから発進する量産型ガンキャノン。コロニー内戦闘も可能な汎用性を有する



# MS機体解析 武装解説

## コストダウンと生産性の向上を図り 性能との両立を実現した設計と構造

量産型ガンキャノンは後期生産型のジム・リリス（RGM-79R）ととも、トパーノの多くを共用することで、生産性の向上を図っている。また、ガンキャノンにおいてはルナ・チタニウム合金だった装甲材は、コストダウンのためにチタン・セラミック複合材へと変更されている。軽量化を前提としたそれらの仕様変更にもかかわらず、本機はガンキャノンに匹敵するスベークを獲得していたともいわれる。しかしながら、ガンキャノンの糸糸機開発は本機で一旦切れることになるのだった。



RX 77  
MASS-PRO TYPE  
GUNCANNON  
Rear view



センサーを付けて距離を上げる高機動型ガンキャノン。高機動性を補償しているのか、実戦においては敵射しなかった。



想像された1機はコロニーの市街地に墜落して爆発し、一般住民に多大な被害を与えたことになった。

### ■武装

本機は固定武装としてガンキャノンと同じキャノン砲2基と頭部バルカン砲2基を備え、携行武装にブルハブマシンガン（90mmマシンガン）を装備。さらにキャノン砲の射撃時に用いるスタビライスト・ギアが設けられている。



ラントセルが大型化しているほか、機体各部に日露の空戦部隊がハニーアを運ぶ。

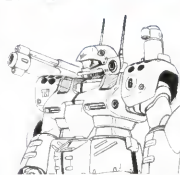


RXシリーズMSの特徴だったコア・ブロックシステムは本機には採用されていない。

### ■頭部バルカン砲



### ■キャノン砲



### ■スタビライスト・ギア



頭部バルカン砲は口径60mm、キャノン砲は240mm口径とされ、機体は非侵襲的にラントセルへ格納される。スタビライスト・ギアは敵艦艇に伸びて格納し、安定性を高める。

## MORE INFO

### 配備部隊とその運用

本機はグレイファントムに所属するMS部隊「スカール・小隊」に2機（1機とも）が配備され、RX 78NT-1アレックスの最終調整に合わせてサイド6に駐留していた。しかし、U.C.0079 12月19日に発生したMS-18E ケンパフラーとの交戦でスカール・小隊は壊滅。本機も撃破されている。



ベガス空戦後、グレイファントム（グレイファントム）、スカール・小隊の機体として運用された。



アレックスの襲撃を目的とする「ルビゴ・ゴング」の機体を使ったケンパフラーと交戦した。



リボーコロニーに潜入するグレイファントム、スカール・小隊を組織させたものの主戦した。



# MS 機体解析 機体バリエーション



RGC-80 GM CANNON

ジム・キャノン

RGC-80  
GM CANNON  
Front view

## ジムとの互換性に秀でた ガンキャノンの簡易量産タイプ

高コストと低生産性から純止のガンキャノンの量産を断念した地球連邦軍が、その簡易量産機として開発したMSがRGC-80 ジム・キャノンである。中東激戦におけるRGM-79 ジムの火力不足を補うための機体にあたり、生産性改善のためシムとの部品共用化が目指された。試作段階ではコア・ブロックの維持、2門のキャノン砲（360mmキャノン砲）の搭載などが試みられている。最終的に完成した量産機は半装砲仕様となり、ジムとの部品共有率は60%以上に達したものの、一年戦争終戦までの総生産数は18機に過ぎなかった。



グリフス機密時のシャッロー配線機 全天候型モニター式コックピットへの簡略化がなされた。

### ■カラーバリエーション

生産数が少ないジム・キャノンだが迷彩塗装や部隊色などのカラーバリエーションは多い。濃淡2色の北米戦艦機、ブラックとグレーのホワイト・ディンゴ機などが知られ、空軍突撃仕様では青い機体もあった。



砂漠迷彩が施されたアフリカ戦艦機、キャノン砲の砲口にマズルブレーキと差し込みが施されるも特徴。

RGC-80  
GM CANNON  
Rear view



## SPEC

全高 18.4m 本体重量 45t 全機重量 65.3t  
機体材料: ナタン合金  
ジェネレーター出力: 979kW  
スラスター総出力: 63,500kg  
武装 頭部: ハルカン砲×2, 240mmロケト砲、ビームライフル、ヒームスプレッダー、バルザック式300mmロケト・バズーカ、ソード

### ■武装

右肩に固定装備するキャノン砲（240mmロケト砲）ガンキャノンと異なり、給弾機構と一体化された。



砲身の簡易式砲尾は簡易可動。予備弾倉は砲身に長大砲を搭載できるが、砲尾には別の機体による補助が必要なようだ。

### ■胴体 ランドセル

シムのものをベースとしつつ、右肩にキャノン砲を搭載し、ランドセルにもキャノン砲対応の改修を加えた。装甲は腰部を中心に強化されている。



左側のランドセルは予備弾倉を隠えるランドセル。右側上部に砲穴があるため、キャノン砲の仰角をとりやすい。

右側のダクトはキャノン砲の前後ダクト。左側のものはMSの燃焼ダクトであり、役割が異なる。

### ■機体比較



RX-77-2  
GUNDAM CANNON  
17.5m

RGC-80  
GM CANNON  
18.4m

いわゆる「先行機型」のジムがら60%程度の部品を共用しており、製造も同じ。マシンガンやシールドの形状（膝下から足元）には、開発時のカウンタースペックを踏襲する左右対称式増設砲を備えている。



## RX-77-4 GUNCANNON II ガンキャノンII

RX-77-4  
GUNCANNON II  
Front view

### ビーム・キャノンを搭載した 連邦軍支援用MSの第一到達点

ガンキャノン 吊装型をベースに開発された。甲装ビーム・キャノン搭載の支援用MSがRX-77-1 ガンキャノンIIである。実体弾発射時の反動とバランスの問題解決を試みた機体であり、解決策として支援火器を実体弾式キャノン砲からビーム・キャノンに変更している。一年戦争末期、ジオン公国軍から奪回したキャリフォルニア・ベースで完成し、数回の試験飛行が行われたとされる。シャブロー戦に試作機が出撃したが出力低下で後退したため、1機戦術試験部隊「スレイブニール」に配備されたともいわれる。



基本機式火器は豊富な弾薬や連続発射力などの特長を持つが、発射反動に耐える必要がある。

一年戦争末期、ビーム兵器の生産性は向上しており、ガンキャノンIIへの搭載が容易となった。



#### ■機体構造

基本構造は原型機であるガンキャノン 吊装型の1ひいてはガンキャノンのものを継承した。さらにビーム・キャノンの採用にともない背部排煙機が廃止されたことで推進器が強化され、短距離ジャンプ飛行が可能になっている。



緑部の装甲形状は、旧軍のガンキャノンタイプMSと異なる。口部には排熱ダクトが取り付けられている。



両肩、頭部、足関節などの扁平形状が変更シエネレーターの影響が確認されたためか脚部ダクトも改められた。

#### ■武装

ガンキャノンIIは支援火器をビーム・キャノンとすることで、発射反動の大幅な低減、大型化傾向にある砲システムの廃止に成功している。補助兵器のマクラン従属型ファイア・ナノはいわゆる手榴弾で、ガンキャノン 吊装型のハンド・グレネードと同じ左腕にホルダーを備える。スレイブニール随所隊は、手持ち兵器としてRX-79[G] 陸戦型ガンダム用の100mmマシンガン装備したという。



ビーム・キャノンと それに連動する多目的調整機構システムを併用、照準精度も向上しているといわれる。



#### SPEC

全高 18.1m 本体重量 62.7t 全機重量

装甲材質 ルナチウム合金

シエネレーター出力 1,300kW

スラスタ・推進力 62,200kg

武装 従属バルカン砲X2 ビーム・キャノン・ミサイル

ライフル マクラン従属型ファイア・ナノ

#### ■機体比較



RX-77-2  
GUNCANNON  
17.8m

RX-77-4  
GUNCANNON II  
18.1m

それまでガンキャノン 吊装型は全高17.8mだったが、ガンキャノンIIで18.1mに、それでもガンダムやジムと同等の機体高に達しないか、標準型によるマッチアップが容易であるため機体上に大膽化した印象があった。

# 関連MS ラインナップ



## RX-77 GUNCANNON ガンキャノン

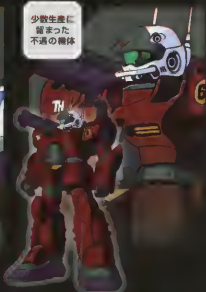
シリーズ  
最初期に  
誕生した  
非人間型MS



対MSを  
意識した  
過剰の  
白いMS



少数生産に  
留まった  
過剰の機体



### ■RX-75 ガンタンク

ジオン公国軍が投入した人型機動兵器(MS)に対抗すべく、地球連邦軍が開発したRXシリーズの1機。脚部とバランサーの開発が間に合わなかったらしく、下半身には無軌道による移動ユニットを装着。そのため機動性は低いものの機体安定性が高いことから大部隊を指揮でき、結果的に後方支援兵器として良好な戦果を挙げざるまでになった。ただし汎用性の低さはいかんともしがたく、一年戦争終結時にはほとんど投入されなかったようだ。

### ■RX-78-2 ガンダム

RXシリーズは機體ごとの用途が明確に分業されているのが特徴で、ガンダムはMS同士の日々戦を主眼に開発された機體である。人型を模したボディは優れた運動性を誇り、ビーム・サーベルを駆使した格闘戦で標的を殲滅する。そのような機體が考慮されたのだ。さらに豊富な機動兵器も用意されていたため、真暗では想定以上の戦果を挙げ、「連邦の白いMS」との異名を与えられるまでに。戦後は新機體の開発母体となった。

### ■RX-77D 改良型ガンキャノン

良好な戦果を挙げたガンキャノンの普及化を目指して設計された本機は、生産性を重視して大幅なコストダウンが図られたことで知られる。具体的にはコア・ブロックシステムの廃止、装甲素材の変更(タン合金セラミック素材の使用)、ジムとのパーツ共用が挙げられる。だが同時にジムとパーツを共用するジム・キャノンのほうがコスト面で優れるとの判断が働いて、量産型と勘打ちながらも、少数量の生産に留まってしまった。



ガンキャノンとの  
連戦で互換兵器  
を行うガンタンク。  
両機を駆る全  
員が重の駆逐を  
両機に並立して  
られた。



ガンキャノンの機  
動を支援するガン  
ダム。機動支援  
だけでなく、両  
機で重たの異  
を示した。



サイド6のロー  
コロニー内で発生  
した騒動に、グ  
レイファント所属  
の機体2隻が参  
入。ただし降下  
中に撃破された。



機動力の低さから無軌道に暴走することも多く、上半身だけを  
使った格闘戦として利用されたとの記録も存在する。

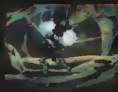


とはいえガンダムの機動が重視されるのは540mmの機関  
で、仮にでも格闘戦では多くの公認MSを駆動している。



両機の240mmキ  
ャノン砲は伸縮式で、非  
常な重さにはランドセ  
ルに格納できる。さら  
に重にはスタビライ  
ズドギアを備えてお  
り、射撃時の姿勢安定  
に利用した。

ジャボロー艦入を演  
るエゥーゴ機を攻撃  
するガンキャノン機  
隊型。戦争ではなく  
格闘戦を演じた。珍  
しいケースである。



総合的な  
能力向上を  
図った  
改修機



エゥーゴのジャ  
ボロー艦隊を攻撃  
するジム・キャノン。  
流行言葉はビーム  
スプレーガンを使用  
しているようだ。



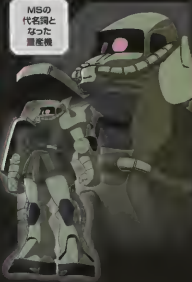
簡易量産機  
ながらも  
高い戦線  
を挙げたMS



ガンキャノンと交戦  
した公敵機パイロ  
ットの代名詞といえ  
ばコズン。ただし機  
手がアムロレイだった  
ため新装を施した。



MSの  
代名詞と  
なった  
量産機



### ■RX-77-3 ガンキャノン 量産型

基本構造はガンキャノンを継承しつつ、攻撃力と防御力の向上を図った改修機。これはジムとの連動行動の強化を目的としたカスタマイズであり、打たれ強い機体が大量火力の射撃部隊を支援するという戦術が期待された。さらに対MS戦だけでなく対要塞攻撃戦でも威力を発揮すると考えられていたようである。しかし生産コストの高騰と一年戦争の早期終結によって数機が生産されるに留まり、戦間記録もほとんど残されていない。

### ■RGC-00 ジム・キャノン

本機はガンキャノンの量産型として計画され、ベース機に若干の手直しを加えた程度でリリースされる予定だった。しかし戦時下の状況を考慮し、ジムの生産ラインを活用したことから設計が大幅に変更。最終的にジムの右翼に240mmロケット砲を1門搭載し、カウンターバランスとして制空機を増加するという形となった。そして最終までに48機(58機との説もあり)が生産。北米大陸での戦線で大きな成果を挙げるに至った。

### ■MS-06J ザクII型

一年戦争の連戦軍、公敵軍を通してもっとも生産数が多いMSがザクIIタイプである。さらに基本設計が豪快であったことから様々なバリエーション機が考案された。なかでもJ型は重力下の地上戦に特化したタイプである。地上では必要最小限の生命維持装置やスラスタを排除すると同時に関節部の滑油や冷却装置の強化といった改修が施された(ただし外見はほぼ変わっていない)。1G環境でも良好な運用性を示した。



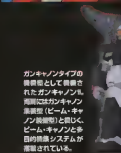
両翼にはガン  
キャノンと異様、  
240mm 低反動  
キャノン砲を乗  
置。ただしビーム  
キャノンと多目的  
攻撃システム(機  
体装甲ユニット)  
に準拠したタイプ  
も計画された。



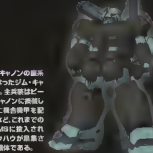
一年戦争後、本機  
やガンキャノン機  
のデータをもとに  
開発された改良  
MSの最大成果が  
開発された。それ  
がRGC-03ジム・  
キャノンIIである。



ランバ・バルバ  
ンにも機体が改造  
され、なかでもコ  
ズン機はセイラ・  
マスが機体をガン  
ジムの機体と  
試みたが……。



ガンキャノンタイプの  
機体と異なり、改良  
されたガンキャノンII。  
両翼にはガンキャノン  
砲(ビーム・キャ  
ノン砲)と異なり、  
ビーム・キャノンと多  
目的攻撃システムが  
搭載されている。



ジム・キャノンの基  
礎とされたジム・カ  
ンノII。主翼はビーム  
・キャノンに改良し  
全機に機体装甲を  
搭載するなど、これら  
の改良MSに投入され  
たノウハウが反映さ  
れた機体である。



おと一歩のところでアムロの乗るガンキャノンが侵入。一方  
は機体で動作不能に追い込まれ、遂に破壊されている。

# MSパイロット——カイ・シデン——

## 皮肉屋の顔の奥で戦いを冷静に見据えて ホワイトベースを支えたガンキャノンのパイロット

カイ・シデンは地球連邦軍所属ホワイトベース隊の員として戦い、一年戦争を生き抜いた少年兵のひとりである。アムロ・レイ系の血を引く両親の間に生まれたカイは、兄にはサイト3から各地を転々としてサイト7へと移住したという皮肉屋で目に見えなかったために周囲から浮きかちだったことから独り立ちを望んで人型機体免許の取得に励んでいた頃、シオン公国軍の襲撃に遭ってホワイトベースへの避難を余儀なくされた。さらに、

正視の軍人のほとんどを失ったホワイトベースで戦いを強いられたカイは、やがてMSのハイロイとして働くことになる。だが、状況に流されるまま戦争の目的に身を置くことに疑問を抱いたカイは、ホワイトベースの仲間たちとは違う視点から一年戦争を俯瞰し続けた。そして、シオン公国軍のスパイに手を束めていた少女、ミハルト・キエとの出会いと悲劇的な別れを経て、戦争意味を自分のなかに問い掛けるようになっていったのである。



公国軍の攻撃でサイド6を占められ、ほかの民間人たちと共にホワイトベースに身を寄せたカイ。一年戦争のなかで成長し、やがては戦艦を支えるMSパイロットとなっていた。

## カイ・シデン KAI SHIDEN

### DATA

年齢:18歳 性別:異星人→少年 身長:不明 能力:MS操縦、機体修理



ホワイトベースに逃げ込もうとしたカイは、度々来た乗組員をセイラ・マクスに「監視員」と一喝される。



戦いに対する恐怖から、カイは止めようとするアムロをばからかしてホワイトベースを降りる。



ホワイトベース乗組員に用いた連判風の制服は、電色の個性化である。

### ▶ 紆余曲折の末に戦う理由を見出したカイの足跡

公国軍のサイト7襲撃でホワイトベースに身を寄せたカイは、人手不足から機体庫の留守などを担い、地球降下後からはガンキャノンのパイロットを務めた(ルナツーでの戦いが初陣とする説もある)が、アムロ・レイはかりに期待をかけるブライト・ノアたちへの反発などから、ホワイトベースを脱走したこともあったという。そして、ヘルファストでホワイトベース隊が連邦軍に組み込まれるようになると、カイは軍人になることを断って艦を降りる。そこでミハルトと出会い、弟

妹を養うためにシオンのスパイとして働く彼女の境遇に共感を抱く一方で、仲間たちを氣にかけて結局はホワイトベースに戻ることになる。その後、ホワイトベースに潜入して命を落とすミハルトの最期にショックを受けるカイだったが、シャブローに到着する頃には立ち回り、彼女のような存在を生まないために戦う決意を新たにす。その思いを胸にホワイトベース隊の主力として戦い続けたカイは、宇宙での激戦を語り続けて無事に一年戦争の終戦を迎えたのだった。



戦争末期には進んで戦う一方で、体制のために死ぬことを拒む明確な意思を示した。



ア・バオ・アーク攻防戦では乗機を破壊されてもなお戦い続け、無事に生還を果たした。



カイが着用したノーマルスーツは、黄色を基調とする一着パイロット用

## ミハルとの出会いと別れがもたらした戦いに進むカイの意識の変化

ホワイトベースへの乗組乗組のカイは戦いに対して海狗だった。その原因に大きな影響を与えたのがミハルの存在だった。公国軍のスパイとして情報を得ようとしたミハルは、ホワイトベースを降りたカイを自分の家に迎えた。だが、カイはミハルがスパイ行為で生計を立てていることに気がつきながら、遠慮もせずに情報を通している。それはミハルたちへの愛情と共に。そうまでしなければ彼女たちが生きていけない戦争の悲惨さを感じたがゆえの行動だったのだろう。さらに、大石塚上との戦いでミハルが命を落としたことで、その思いは強くなっていく。ジャブロー戦でカイが喰いた「ミハル」梅はもう戻らないぞ。お前みたいな子を導き出すためにジョンを叩く。徹底的にね」という言葉は、そうした意識の変化の表れだったといえる。



ホワイトベースを降りてミハルの家に居る彼女のカイは、彼女の不満や苦悶がスパイとして世に知られることを恐れた。

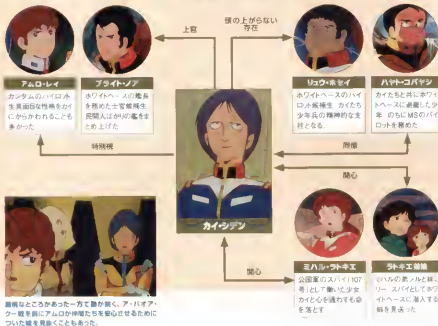


ジャブロー戦で喰い殺された少女を、これ以降、抑えきれなくなることはなかった。

戦いを前にして、彼女と別れ、その苦悶を自分自身で抱えようとした。



## カイ・シデンを巡るさまざまな人間関係



## ▶心を入れ替えたミハルの悲劇

ホワイトベースに潜入したミハルは、艦内で展開される想定外の光景を目にして自分も戦おうとした。だが、その決意が彼女を死に追いやることとなる。



ミハルは自分の家族と同じ家族の子供たちを必死に戦おうとする彼を助けた。しかし、自らの意に反して

戦いに巻き込まれ、生きるためスパイに身をまかせた少女ミハルカイとの出会いは彼女にとって悲劇となった



## ▶ MAIN MS

### RX-77 ガンキャノン

連邦軍の「V作戦」で開発されたRXシリーズの中距離支援用MS。サイド7脱出時にホワイトベースに搭載された1機がカイの乗機となった。



### RX-75 ガンタンク

長距離砲撃支援を主体とするRXシリーズMSのひとつ。ベルファストが公国軍に襲撃された際に、ホワイトベースに戻ったカイが搭乗した



得意の砲撃戦によって友軍を支え続けた機体  
支援用MSという開発コンセプトの下に誕生したガンキキノン  
ガンダムをはじめとする友軍機のサポート役として能力を発揮した



北米

ホワイトベースが地球に降下したエリア。一年戦争緒戦に実施された地球降下作戦によってシオン公国軍地球方面軍(司令官はガルマ・ザビ)の支配下に置かれている。

オデッサ

黒海沿岸に位置する鉱山エリア。貴重な鉱物資源が大量に採掘できることから、公国軍の生命線となった。

## 北海

大西洋の北に広がる海洋エリア 太平洋と大西洋を結ぶ北回リルートの一部であることから、公国軍潜水艦部隊が活発に活動。船舶の通商ルート破壊が頻発した。

ジャブロー

地球連邦軍本部が置かれた地下要塞、密林の下に広がる天然の洞窟を利用しているため、位置特定は困難

ア・バオア・クー

ジョン公国本国であるサイド3を防衛するための重要拠点。一年戦争最後の激戦地としても知られる。

81

[サイド7への遷移](#)

一年戦争開始から9ヶ月が経過して、これまでジオ  
ン軍が投入した人型戦機兵器MSに劣勢を占めて  
いた地球連邦軍も独自のMSの開発に成功。  
作17(フ)のバンチコロニーで運用試験が行  
われ、その結果、もしもホワイトベースを地球連  
邦軍ファルム隊がコロニー内を偵察。試験場が  
海中の中へMSが故障を受けてしまう。それ  
を人の少年「アムロ・バグ」がガンダムを駆  
りこみ、公国軍MSを破壊。被害を免れた  
艦はホワイトベース  
と名入れされた。



ガンキャノンも2機分、  
パーツが破壊。さらに  
両機、現場に墜入した。  
チャ・アズナブルが現場  
を調査するという事件  
発生している。

02

## 北米大賤、續斷

サイドから出たワイプベスは連戦相手のポイントナツに射した。その場で受け取った警告音は、遊撃艇本部の位置するジブローを指すことになった。しかし大気圏突入直前にニア準いのMS部隊の襲撃であつてと移動コースが振替にそれ、突撃勢力圏では北米に降下してしよう。そのときのワイプベスは民間人や新兵が乗員のほとんどもめていたのだが、戦艦に耐えらる者がMSに搭乗。宙中のパイロットとして防衛艦に参加することになった。



ガンキャノンのパイロットはカイ・シデンが担当。戦闘経験不足から戦地に落ちることもあったものの、赤軍との連携で難を逃れている。



03

中央アジアから欧州へ

公国軍地球防衛軍司令官ガルマ・ザビの長女として太平洋に配したホワイベースはアジア地区に属す。ユーシア大陸を横断してジャロウへ目を向けるようになった。しかし公国軍は逆襲の手を留めず、デパラル率いるケリラ部隊の攻撃に陥れて絶たれし。さらに欧州では連邦軍の一大反乱作戦（オプティマ作戦）が計画されつつあり、ホワイベースも密に、黒海沿岸のオデッサ地区で実戦を求むる機関への参加を求められたのだ。



ホワイトベースを肉撃し、  
めた公園軍はグフヤト  
といった新艦MSを導く  
ガンキャノンも激戦の平  
面に立つことに。



## 戦況の経緯

MSの開発は一年戦争以前のジオ公国から始まっている。ミノフスキー博士が子爵下士の有様で現職の運用員を兼ねた人財育成兵隊というコンセプトは、当初、公国内部でも疑問視されたといわれるが、試作とテストを繰り返すことで実用を開発。公國軍への施に意いたった歴史家らがサポートである。海空軍も訓練施設を通してMSの存在を知りしいう。しかし土木建築の進展程度と認識しておらず、これが公國軍の機體を打穿する要因となった。それでも一年戦争開始直後から開発に着手すると、優越的な経済力を駆使した公國軍は素早い対応などから約8ヶ月で開発に成功している。

## U.C.0079

- ・1月3日 一平駐米、特使、ジョン公使、地球連邦政府に対して国書を提出。異議布告と同時にサイド1、2、4に攻撃要請。
- ・1月4日 サイド2のデズ・デス・コロニー「アイランド・オブ・フィッシュ」、地球連邦宇宙センターに入る。
- ・アイランド・オブ・フィッシュ、オーストラリアに落下。
- ・1月15日 ルウム開発、発表。
- ・連邦軍第一連合艦隊放散、撃沈。艦隊司令官レベリ、公使軍「黒い三日月」によって捕虜になる。
- ・1月28日 公使、サイド6を達して連邦政府に休戦条約締結の申し込めを行う。
- ・1月31日 南極条約、締結。

## U.C.0079

- ・2月7日 公開車、地球降下作戦、開始。
- ・3月1日 公開車、オデッサの鉱山基地占拠。
- ・3月11日 公開車、キザロウランドへベース移住。
- ・公開車、地上の3分の2を勢力下に属し、戦線維持に努力をしながら戦局は膠着状態に。
- ・4月1日 連邦軍、V作戦とビビッド計画、発動。
- ・7月 RX-78ガンダム試作1号機、ロールアウト。この完成をもってRX-79計画、発動。
- ・8月 連邦軍、試作型MSの最終テストをサイド7で開始。
- ・9月18日 ホワイトベース、サイド7に移動。
- ・コロニー内でサイド7のMS戦が激化する。



## 北海からジャブローへ

オデッサを流る鐵道は連邦軍の勝利に終わり、これを機に地上でのミタリ・バランスは連邦軍側に傾くようになった。一方、ホワイトベースはアイランドから北海を抜け、ついにジャブローに到達。しかしそこはすでに奪われたわけではなかった。ホワイトベースは公国軍から「ニュータイプ部隊」として注視されており、連邦軍上層部にとっては重要な存在に変わっていたのだ。しかもホワイトベースは連邦軍の公国軍マッド・アングラー隊がジャブローの宇宙船ドックの位置を特定、オデッサの戦戦を脱出するジャブローに対する降下作戦を仕掛けた。やむなくホワイトベースも防衛戦に参加。彼々と戦下する公国軍MS部隊を迎撃した。

アイランドのベルファスト基地ではカイザ一時的にホワイトベースから撤退。代わりにハヤト・ゴバヤシがガンキャンノンに転乗した。



ジャブローに侵入し、公国MSを攻撃するホワイトベースから送るガンキャンノン。敵機は多量に撃破された。

スゴック 他

## 再び宇宙へ

ジャブローでの防衛戦を制した連邦軍は再編した艦隊戦力をルナツーに転送。公国軍に対する本格的な反乱作戦を実施した。第一目標は宇宙における公国軍の拠所、ソロモンである。一方、旧連邦の第13独立戦隊に配備されたホワイトベースは、劇中の連邦軍開戦からルナツーとは反対方面に移動。地球軌道軌道やサイド6、デキサス・コロニーで公国軍と交戦を繰り返しながら、回しての任務を果たしていった。そしてU.C.0078.12.24、準備の整った連邦軍艦隊がソロモン攻撃戦を開始。ホワイトベースも攻撃部隊に参加。そして連邦軍が投入した新兵器、ソーラリスシステムの発射が契機となり、無敵戦地に成功したのだ。

ソロモン軌道にあたり、カ・ドムと交戦するガンキャンノン。この直後、至近距離からの砲撃で艦隊の撃退に成功している。



新たに交戦されたカ・ドム。しかし死光からの一撃を受けて倒れ、ハヤトも真面目な表情でいる。

リック・ドム 他

## ア・バオア・クーでの決戦

ソロモン攻撃に成功した連邦軍はサイド3への侵襲作戦（真一号作戦）を敢行。宇宙要塞ア・バオア・クーを舞台としてサイド3に向かうことにした。一方、公国では公王デギン・ゾド・ザビを襲撃したギレン・ザビが軍の全権を掌握。ア・バオア・クーに戦力を集中し、連邦軍艦隊を迎え撃つ姿勢を鮮明にした。こうしてU.C.0079.12.31、両軍の戦いが開始された。ホワイトベースは連邦軍主力とは反対方向から要塞に攻撃を仕掛け、公国軍の戦力分断に成功。戦線は次第に連邦軍有利に推移していった。だが最終局面に立つホワイトベースは多大な被害を受けて窮乏。ガンキャンノンも失われたのだ。



カイとハヤトのガンキャンノン。真一号作戦で連邦軍MS部隊が力点を要する戦況となり、防衛部隊と交戦。要所に進軍する公国軍の艦隊に尽力している。

## MS OTHER 戦記

## 複数配備されたガンキャンノン

当初、ホワイトベースで運用されたガンキャンノンは1機だった。開発段階では6機が製作されていた。うち3機がテストのためにサイド7に運ばれたのだから、公国軍偵察部隊の襲撃を受けて2機が破壊（たまたま組み立て前のハロー状態で破壊された）。残る1機がホワイトベースで運用されたのだ。とはいえガンキャンノンの生産がそこでストップしたわけではなく、いくつかのバリエーション機が開発されたほか、ガンキャンノン自体も少数生産され、各部隊に配備されている。たとえばジャブローで補給を受けたホワイトベースには新たに1機が配備。カイ・シデン機に「C-108」ハヤト・コバヤシ機に「C-109」のナンバリングが施されている。一方、ア・バオア・クー攻防戦には「203」とマーキングされたガンキャンノンが参戦していたり、第16独立戦隊サフレット隊には3機のガンキャンノンが配備されていたりと、各種戦線に投入された記録が残されている。



第13独立戦隊とつながる部隊に任命されたホワイトベース機。ガンキャンノンの追加配備は貴重な戦力になった。



ア・バオア・クー戦に参加するガンキャンノン。前線に配備されたホワイトベース機は2機がホワイトベースに配備された。注目に値する機体の所属のバリエーションは不明。

戦況中、彼らに攻撃を受け、ホワイトベースが受ける被害は2機のガンキャンノンに集中した。



第四からの集中砲火に耐え切れず、まずはハヤト機、続いてカイ機が破壊された。たまたま機体は倒れながら、敵に一矢を報いている。

ザクII型、リック・ドム 他

## U.C.0079

- 11月 連邦軍、ジムを使用した実験データ収集部隊を設立。
- 11月7日 連邦軍、オデッサ作戦を開始。
- 11月9日 オデッサ作戦、終了。以後、欧州からアジア地区における公国軍勢力は激減を始める。
- 11月30日 公国軍、ジャブロー一降下作戦、開始。
- 12月 公国軍特務部隊（サイクログラス）、連邦軍北極基地を襲撃。
- 12月13日 公国軍、サイド6のリュウ・コロニーを襲撃。
- 12月24日 連邦軍、ソロモン攻撃戦、開始。
- 12月31日 連邦軍、ア・バオア・クー攻撃戦、開始。

## U.C.0080

- 1月1日 一年戦争、終結。

## 戦争博物館の展示物として

ア・バオア・クー戦でホワイトベース所属のガンキャンノンは失われたが、ニュータイプ部隊の序盤戦として関係者の記憶に残ることになった。ケネディ宇宙港スペースポートに併設された戦争博物館にガンキャンノンのレプリカが展示されたのも、かつての輝かしい記憶が影響したためとされている。たがこの施設はカラハの活動拠点のカモフラージュに使われており、クリップ戦役当時の観覧者はほとんどいなかった。たまたま

戦争博物館はハヤト・コバヤシ・ニュータイプ部隊に所属していたことを要請し、危険視され、閉鎖に追い込まれていた。



戦争博物館に展示されているガンキャンノンC-108。カメラの色が実機と異なるのはレプリカなので致し方ないという。



「V作戦」において中距離支援用として開発されたガンキャノンは、優れた支援性能を発揮した。そのため、複数のバリエーションが開発され、MS部隊において重要な役割を担った。

### KEYWORD

#### V作戦

地球連邦軍におけるMS開発およびMS運用の発展・衰退、さらにはMS戦術の確立などを含めた計画。本計画において、RXシリーズや、ジムが開発されることとなった。

#### 支援用MS

ガンキャノンなどによって後方戦や部隊などを支援することを目的とするMS。ガンキャノンがその最前線の機体にあたる。MSの部隊運用に組み込まれることも多く、一年戦争中は地球連邦軍だけでなく、ジオ公団軍も開発、運用している。

### RxM-1

地球連邦軍が初めて開発した一足歩行式のMS。ガンキャノンの前身の機体で「開発にあたり」はジオン公団から受けた技術者などの協力があったとされる。曲げられたサウのテクなどもフィードバックされ、開発後は各種チューニングのテストなどが行われたのちに、解体された。

発展

発展

発展

### RX-77-1 プロトタイプ ガンキャノン

RxM-1ののちに開発された機体で、ガンキャノン初原型とも呼ばれる。ガンキャノンAなどのベースになったとも考えられるが、詳細は明らかになっていない。

装甲進化

改良

### RX-75 カタンク

「V作戦」で開発されたMS。脚部を持たず下半身はキャタピラとなっている。主兵器は肩部の120mm低反動キャノン砲で、後方支援用MSとして運用された。頭部と胸部にコックピットを備えており、両者が武器管制を徹底的に機体操作をそれぞれ担ったが、のちに改修され、パイロットひとりでの運用が可能となった。

### RX-77-1A ガンキャノンA

RX-77-1プロトタイプガンキャノンの派生型とされる機体。ガンキャノンの機動性の維持と重装甲化を優先した機体で、装甲形状や武装が異なる以外はカウングスベークなどもほぼ同じであった。



改良

### RX-78-1 プロトタイプガンダム

「V作戦」で開発されたガンダムの第一試作機。機体の軽量化に加え、宇宙空間での運用を目的とした冷却ユニットを装備し、足元には姿勢制御バーニアを備える。また、大気圏再突入を想定した耐熱フィルターシステムも有していた。主兵装はストラップ付きのハンド・ショットガンスタイルのビーム・ライフルを装備する。



### RX-78-2 ガンダム

「V作戦」において開発されたRXシリーズの1機で、自衛隊用の試作MS。ルナ・チタニウム製の装甲に加え、教育型コンピューターなどの新技術が投入されている。また、エネルギーCAPによるビーム・ライフルを主兵装とするなど、極めて高い攻防力を有していた。本機で得られたデータは地球連邦軍製の主力MSの開発に反映されたほか、バリエーション機も多数が開発された。

発展



分析・研究

### RRF-06 ザニー

地球連邦軍による最初期のMS。適したザクを戦術開発局が分析、改良した機体とも、RX計画とは別のMS開発計画によって開発された機体ともいわれる。後者の場合は、ジオニック社から機軸にパーツ提供を受けていたとされる。武装は60mmバルカン砲と、120mmキャノン砲。

簡易生産化



### RGM-79 ジム

ガンダムで得られたデータを基に開発された地球連邦軍の主力MS。生産時期や場所によって前型と後型に分けられる。一年戦争末期の地球連邦軍を支えたMSで、様々なバリエーション機が開発され、その後継機は戦後も主力機として配備されるに至った。

## RX-77-2 ガンキャノン

『V作戦』において開発されたRXシリーズのうちの1機。両肩のキャノンからもわかる通り、中距離支援を中心とした運用が想定された。ルナ・チタニウム合金やコア・ドロッパーシステムの採用など、他のRXシリーズと同様の仕様となっている。両肩のキャノン砲は後述のサイロ・ポッドに換装可能をほか、ビーム・ライフルやガン・ダレナーなどを装備、量産型と高火力を兼ね備えた支援機として完成した。ホワイトベース隊に配備された機体の中には、量産が完了、運用



生産



改良

## RGC-80 プロトタイプ ジム・キャノン

ガンキャノンの量産を目指した、地球連邦軍が開発した中距離支援用の試作MS。ジムをベースに、強靭な装甲などの特徴、キャノン砲の装備などが行われ、本機で得られた各機データによって、ジム・キャノンが開発されるに至った。

改良



## RX-77-3

### ガンキャノン重装型

単機または同型機のみでの部隊戦術を想定したガンキャノンのバリエーション。キャノン開発射撃の反動の低減に加え、火器と装甲の強化が図られている。本仕様による重量増加に対しては、スラスター推力を向上させることで対応したが、予想ほどの機動性を獲得できず、少数が生産されたのみとなった。

生産



部品共用

## RX-77D

### 量産型ガンキャノン

一年戦争末期に開発されたガンキャノンの量産仕様機で、本格的な量産に先駆けてその検討のために生産製造された機体といわれている。他のジム系MSとのパーツ共用や部材材質の変更など、生産性とコストダウンに主眼を置いた仕様変更と改良が施されている。

## デニム カスタマイズ

## RX-77D

### 量産型ガンキャノン (スカーレット増強形態)

一年戦争末期、サト6のリコーコロニーに駐屯していた地球連邦軍のスカーレット隊に配備されていた機体。このほかにもオーストラリアに配備されたホワイトディンコ隊の保有機もある(ただしカラーリングが異なる)。





強化・発展

### RGC-8D ジム・キャノン

ガンキャノンの開発量産機として開発された機体。生産性の改善と向上のために、ジムとの部品の共通化が図られ、その部品共有率は80%にも達した。中距離帯での火力支援という運用目的のため、設計段階では2基のキャノン砲の搭載も試みられた。一年戦争後も近代化改修のうちに配備された機体もある。



技術転用

### RGC-83 ジム・キャノンII

ジム・キャノンや量産型ガンキャノンのデータをベースに開発された支援用MS。実体強ではなく、ビーム・キャノンを採用している。RGM-79N ジム・カスタムとのパーツ共有を図ったほか、RX-78NT-1 アレックスのチヨバム・アーマーのコンセプトを継承した外装を有する。

改造

改造

改造

### RX-77-3 ガンキャノン重装型 (ビーム・キャノン搭載型)

ガンキャノン重装型はキャノン砲の搭載が可能で、ガンキャノンIのビーム・キャノンと多目的精密照準システムを装備できた。本仕様が運用されたかは不明。



### RX-77-4 ガンキャノンII

単装ビーム・キャノン搭載の支援用MSで、ガンキャノン重装型をベースとする。実体弾発射時の反動とバランスの問題解決策としてビーム・キャノンを採用している。一年戦争末期、カリフォルニア・ベースで完成し、数千機が配備され、ジャブロー戦にも投入されたといわれる。

チーム  
カスタマイズ

### RX-77-3D ガンキャノン重装型タイプD

ガンキャノン重装型の改修機。脚部とランドセルにスラスターを追加し、機動性の低下に対応した仕様。テストにおいて高性能を示し、制式採用が決定するが、高コストなどを理由に少数の量産にとどまった。北アフリカ戦線に配備された機体などが知られている。



### RX-77-3D ガンキャノン 重装型タイプD (スレイヴ・レイス 第四機)

地球連邦軍の第20機強化近衛部隊である「スレイヴ・レイス」に配備された機体。通常のイエローを中心としたカラーリングから、部隊の共通色であるグレー系の塗装に変更されている。







## 支援用MS

地球連邦軍のガンキャノンとガンタンクに端を発する支援用MSは、ミドルレンジ以遠の距離帯における攻撃を重視したMS分類であり、MS本来の姿たる白兵戦用機動歩兵ではない。だがMSによる支援攻撃の有効性が証明され、各軍が採用することとなった。

### MSの運用に一石を投じた砲撃戦用のMS群

中距離または遠距離からの砲撃を第一義としたMSのカテゴリーが支援用MSである。RX-77 ガンキャノン、RX-75 ガンタンク、MS-06K ザク・キャノンなどが該当した。近接格闘戦能力は限定的、あるいは皆無であり、想定された交戦距離は一般的な白兵戦用MSと大きく異なっている。

MS本来の「白兵戦用機動歩兵」とは正反対とすらいえる支援用MSは、ミノフスキー粒子散布環境下での運用性に問題を抱えるように思える。実際、ミノフスキー粒子散布環境下で白兵戦用MSと支

援用MSが交戦した場合、前者が有利であることは間違いない。

しかし、この想定は前提を無視している。支援用MSが「支援」する対象が僚機の白兵戦用MSであり、白兵戦用と支援用MSは同じ部隊で戦う。支援用MSが「中距離以遠から攻撃し、白兵戦用MSは近距離以内で敵機と戦う状況」が想定されているのだ。

また支援用MSもMSである以上、ミノフスキー粒子散布環境での運用能力を持ち、光学観測可能な距離帯での砲撃を基本とする。





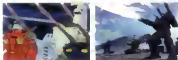
## 支援用MSの誕生と採用組織の増加

支援用MSを生み出したのは、MSのハイブアーマーのシン・アキラ軍ではなく、後発の地球連邦軍であった。地球連邦軍による初のMS、RX-75ガンタンクは結果的に支援用となつたに過ぎないが、ガンキャノンが最初から支援用MSとして開発された。連邦軍の「作戦」はMSそのものの開発・生産だけでなく、運用方法の確立を目指していたため、11月戦用のRX-78ガンダムと支援用のガンキャノンという形で同時並行的に開発が進んだ。

ホワイトベース隊の地球降下直後、初めて大戦投入されたガンキャノンは、ガンダムの支援を中心に活躍し、連邦軍はその量産化を企図した(RX-80シム・キャノンとして発表)。そのコンセプトは公軍軍の目にもとまり、公軍最初の支援用MS、MS-06Kザク・キャノンが開発されるに至った。さらにはMS-09Kトム・キャノン、MS-14Kゲルグ・キャノンなどが開発されたことからみて、公軍軍が支援用MSを高く評価したことが理解できよう。その後もMSは開発され、第一期MSでも支援用が登場した。

## 支援用MSの機能的特徴

支援用MSと一般的な戦闘用MSとは設計、大きさ、用途にある。支援用MS最大の特徴が「キャノン砲やミサイルなどの大威力兵器を固定装備していること」であり、これによって砲撃・支援任務がある。その反面、近接戦闘能力は軽視される傾向にあり、ビーム・サーベルなどの格闘兵器を備えない機体も少なくない。



砲撃やミサイル、フックに支援用兵器を搭載するのが一般的で、これによって機体は干渉せずに支援活動が可能になる。

## ■支援用MSの構造と技術傾向

### 支援兵器

砲撃・支援用となる中・長距離兵器。支援用MSの主兵器である。実体弾式キャノン砲やビーム砲をMSの胴体またはバックパックに固定装備する例が多い。

### 装甲

対空・連邦軍系列機は機動性より耐爆性を重視する傾向にあり、装甲面を保持し、中距離支援用MSでは顕著な例が多い。



### センサー

射撃の都合上、白兵戦用MSより強力なセンサーや追加センサーを備える。射撃センサーも高機能な場合が多い。

### 手持ち兵器

中距離支援用MSの場合、手元の基本機能は白兵戦用MSと同等なため、手持ち兵器は使用可能。格闘兵器は未装備の機体もある。



## MORE INFO

### 「近接支援用MS」の不在

右記のように支援用MSは中距離支援用MSと遠距離支援用MSにカテゴライズできるが、近距離支援用MSは確認されていない。これは一般的な白兵戦用MSがMS戦における「近接支援」を兼ねるためである。これに加えて、運用が想定される距離帯の都合上、白兵戦用MSの任務の一部が担えない近距離支援用MSは、有効性に大きな疑問符がついてしまうことも問題だったと考えられる。



### RX-79[G]

#### 陸戦型ガンダム

連邦軍の陸戦用MS、軍用アジの戦術地帯では、100mmマシンガン装備の3機編成で支援しあうこともあった。



### MS-07C-3

#### グフ量産型

固定兵器装備のC型の1機編成、両脚にフィンガーバルカン砲を内蔵しており、近接支援用に近しい仕様であった。



## 中距離支援用MSと長距離支援用MS

支援用MSは想定される砲撃距離によって、中距離支援用と長距離支援用に大別される。一般に前者はMSの機能保持に注力し、後者はいわゆるタンクタイプの半MSの機体が目立つ。例外はF90Sガンダム、F90サホートタイプ・オプションなど、そもそも長距離

支援用MSは絶対数が少なく、連邦軍機が大半を占めた。連邦軍以外では既存のMSを改修・増強して支援用MSとしたため、大きく仕様が異なる長距離支援用は実現しにくいこと、光学観測の範囲外への攻撃が難しいことなどが理由であろう。

## ■中距離支援用MS

中距離帯からの支援攻撃を目的としたMS。白兵戦能力は低下するが、MSとしての基本性能は維持した。



RX-77 ガンキャノン

## ■長距離支援用MS

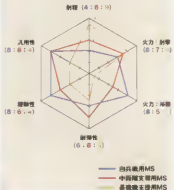
長距離帯での砲撃戦や支援攻撃、特化したMS。MSとしての機能は限定されるが、火力に優れている。



RX-75 ガンタンク

## 白兵戦用MSと支援用MSの性能傾向比

支援用MSは射撃と火力が高いが、白兵戦用MSに優越する印象だが、支援用MSも白兵戦に巻き込まれる以上、役割が異なるというのが実態だ。



## 支援用MSの主兵装

支援用MSが砲撃や支援攻撃に用いる兵装として、実体弾式のキャノン砲やメカ粒子砲タイプのビーム・キャノンが一般的であり、大半がこの2種で占められる。火力・射程・機動能力などを考慮すると最適な判断である。実体弾・ビーム式キャノンとは異なるメカ粒子を有するミサイルや大型機関砲を砲撃・支援攻撃用に採用し

事例もあるが普及していない。武器も光学観測可能な範囲内に有視界戦闘での使用を前提とする。実体弾式は間接照準射撃にも対応するが、そのための観測手段がMSにない。ミノフスキー粒子の影響で観測員との通信が困難しやすいなどの問題もある。



弾道などへの攻撃では間接照準射撃も有効。支援火器としてのミサイルは第一次ネオ・ジオン戦争期に興隆した。

## ■キャノン砲（実体弾）

実体弾を発射するキャノン砲やロケット砲。実体弾ならではの多様な弾種、ダメージの確実性、威力ガン・ミネータ、出力に左右されないなどの利点を持ち、支援用MSでは一年戦争期の機体で採用例が多かった。

ジム・キャノン  
ガン・キャノン



MS-06B2  
ドム・キャノン 機動タイプ



## ■ビーム・キャノン

長砲身のメカ粒子砲。大半が間接照準タイプであるメカ粒子砲ならではの威力とコンパクト性、優れた弾速と命中精度、低反動などが利点として挙げられる。一年戦争後期から普及しはじめ主流となった。

MS-06C  
ガンダム・キャノン



ガンダム・キャノン



## ■ミサイル

多連装ホトランチャーなどで装備される誘導弾。装備形態上、多量同時発射による瞬間最大火力、優れたミノフスキー粒子散布環境下での追従性能に問題を抱えることが嫌われる。採用例は少ない。

AS-01  
ミサイル



ジムII  
R&B



## ■マシン・キャノン

実体弾式マシンキャノン（機関砲）のなかでも大型のモデル。単発の火力は他の支援火器に劣るものの、連射性が圧倒的に高い。F70 リスはマシンキャノンを装備するが他の兵装にも備えられた。

G-70  
マシン・キャノン



ガンダム・キャノン



## 支援用MSの運用

分類名が示すように、支援用MSに想定される運用形態は他の兵器（特に自兵戦用MS）のサポートである。前線に自兵戦用MSに任せ、その後方から支援用MSが砲撃するのが一般的である。たが、有視界戦闘の特性上、支援用MSといえども安全圏から攻撃できるとは限らず、しばしば敵陣に晒された。

## 1 支援砲撃

後方からの砲撃で敵機を攻撃。制動・足止め・前方・展開する準備が戦いやすい状況を作り出す。任務の性格上、必ずしも命中確率を与える必要はない。



## 2 対空攻撃・防衛

支援火器の長い射程を活か、航空目標を攻撃する。準備をするための対空防衛も同様である。実体弾式の支援火器の場合、対空砲撃が多用される。



## 3 対艦・対据点攻撃

高火力と長射程を活か、宇宙艦船や据点などの高強度目標に攻撃を加える。対地上拠点の場合、目標を目標にない間接照準射撃も可能である。



## 4 近距離戦闘

艦船の肉薄を許した場合、機動兵装や格闘兵装で対抗する。自兵戦用MSと比して近接戦闘、格闘能力は低いが、対艦できないわけではない。



## 黒いホワイトベースでの支援戦闘

一年戦争時、地球降下直後のホワイトベース隊が、公国軍主力で戦った。この際、自兵戦用MS1機と支援用MS2機が連携し、対空攻撃・防衛や支援砲撃を含む戦闘を繰り返した。

## 1 支援用MSの出撃

制空戦闘機トップと主力戦艦マゼラ・アタックの攻撃に晒されたホワイトベースが、カン・キャノンとガンタンクを出撃させた。ガンタンクは左翼に展開している。

## 2 対空戦闘

ト・隊の攻撃に晒されたホワイトベースを守るべく、ガンタンクが対空攻撃を開始。カン・キャノンはまず、前方から迫るマゼラ・アタック隊に封鎖した。



## 3 ガンタムの出撃と空中戦

カルマ戦艦が戦力を集中させるなか、星ははるかにガンタンクが出撃。ガンタンクを利用した空中戦を展開し、戦局はホワイトベース隊に傾き始めた。

## 4 支援終了

ガンタンクがカルマ戦艦の機関に入った時点で、支援用MS2機は支援攻撃を停止。弾薬切れや有効射程の問題だったとみられる。

## 5 ガンタムへの支援

ガンタムの着地時に、敵艦からの攻撃を受けようという。カン・キャノンとガンタンクが支援攻撃を開始。ト・隊の低空侵入を阻止した。

## 支援用MSと支援装備を含むMS部隊の編制

MS部隊の最小単位となるのがMS小隊で、3〜5機のMSと1基の兵器を含む例もある。編制される支援用MSを含む編制でも数は変わらないが、同一小隊内の支援用MSの配備数は必ずしも定めていない。支援用MSの絶対数が少ないため理想的な編制が可能とは限らないこと、代替兵器を含む編制が可能なことなどが理由である。

支援用MSの代替兵器とは、文字通り支援用MSに近い運用が可能な機体を指す。いわゆる「バズーカ」装備の汎用MS、RB-79ゲールに代表される簡易機動兵器などが該当する。当然、純正の支援用MSより砲撃能力は劣るが、支援任務に対応可能だった。

他の理由としては、MSの部隊編制の模範がある。特に一年戦争時は、MS小隊における支援用MSの最少数が模範段階にあり、ホワイトベース隊のように1機戦用MSより支援用MSが多い部隊すら存在した。

一年戦争後、支援用MSや代替兵器を含まない編制が一般的となったが、支援用MSは1.0150年代に入っても運用され続けた。

## MORE INFO

### 局地戦用MSやモビルボットの支援タイプ

ガンタンクやザク・キャノンがそうであるように、初期の支援用MSには局地戦用MSの性格を持つ機体が目立った。その延長線上にあるのが公国軍のアンダリスで、水陸両用MSながら前線の白兵戦用MSと後方の支援用MSが開発された。連邦軍の宇宙用簡易機動兵器「モビルボット」ゲールも近接戦闘型と支援型に分けられた。



MSM-04G ジュアッグ

アンダリスの簡易戦用(重武装)水陸両用MS。シャッロー機構において支援用MS的な運用が想定された。



MSM-04N アッグガイ

特殊作戦用MSアンダリスの1機種。シャッロー支援下で白兵戦を担出する機体があったといわれる。

## 基本的な部隊編制

支援用MSまたはその代替機を含む部隊編制。MS小隊は時代や組織などによって変化するが、おおむねの傾向はある。下記のものこそ一部のMS小隊内に1機の支援用MSまたは代替機を含む編制が基本である。代替機にあたるバズーカ搭載機の場合、MSそのものは通常と同じで兵器のみが異なる。711

### ■支援用MS1機を含むMS小隊

白兵戦用MS3機、支援用MS1機からなるMS小隊。一年戦争時の連邦軍において理想的な編制のひとつ。あるものの「ア・ハオア・クエ」防衛隊の「不死身の第四小隊」がこの編制。たといわれる。



RGM-79E シムズ

RGC-80 シムスキャノン

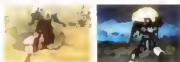
### ■簡易機動兵器を含むMS小隊

支援用MSの代わりに簡易機動兵器を組み込んだMS小隊。一年戦争末期の宇宙戦線において、連邦軍は簡易MSゲールを支援用MSの代替機として配備しており、同じ小隊で運用した例が少なくない。



RGM-79 シムズ(通常装備)

RB-79 ボール



手持ち兵器は、MS本体の仕様やパイロットの好みによっても変更されるため、バズーカ装備支援用代替機ではない。

### ■バズーカ装備機を含むMS小隊

支援用MSをバズーカ装備の白兵戦用MSで代替したMS小隊。バズーカ・無反動砲・ロケットランチャーは、射程・火力・弾種などの面で支援用MSのキャノン砲に近い特性を有しており、中距離支援に適した。



RGM-79 シムズ(通常装備) RGM-79 シムズ(バズーカ装備)

### ■支援用MS 代替機のためのMS小隊

通常装備の白兵戦用MSを一切含まず、支援用MSかその代替機のみで編制された部隊。カンキャノン専任型で想定された部隊編制が代表的なもので、部隊単位で前線と後方を区分けする発想に立っていたようだ。

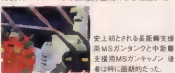


RX-77-3 ガンキャノン重砲

## 支援用MSの歴史

### 1 支援用MSの誕生

U.C.0078 無手の「RX計画」において開発されたガンタンクが結果的に支援用MSの胎動し、その後連邦軍はMSの役割分担を想定した開発計画に移行。ガンキャノンと中距離支援用MSを確立した。



史上初とされる長距離支援用MSガンタンクと中距離支援用MSガンキャノン。後者は特に画期的だった。

### 2 支援用MSの減少

U.C.0080年代中期に入ると、MS全体の高性能化のため中距離支援用MSはニッチな存在に。それでもAE(アナハイム・エレクトロニクス)社やアクシズ(ネオ・ジオン)では、少数ながら開発が続いた。



地上戦を中心とした有能性は認められていたようだが、メタス系やガルス系の改修機として実用化された。

### 2 公国軍の支援用MS開発

一年戦争後期、ガンキャノンの特性に注目した公国軍が、ザク・キャノンを開発。中距離支援用MSの有効性を認め、以後ハムタイプやケルグタイプで中距離支援用MSを開発し、支援に投入した。



対空防衛用MSの開発計画から移行したザク・キャノン。公国軍の中距離支援用MSの損失となつた。

### 4 第二期MSと支援用MS

MSの原点回帰と低コスト化を求める戦略環境の変化のなかで、頭頂高15m級の第二期MSが誕生。この時代にも連邦軍は支援用MSの有効性を確認していたようで、F70系を採用した。



支援用の第二期MSの1機種Gキャノン。量産化されており、配備数は比較的多かったとみられる。

## 支援用MSを含む編制の実例

支援用MSの実戦投入開始が一年戦争後期(U.C.0079.09.10)あたり。支援用MSの不足「V作戦」におけるMS運用体制の標準などによって、支援用MSを含む初期の部隊編制は多様化した。そもそも1個MS小隊に何機の支援用MSを組み込むべきか、支援用MSのみの部隊を編制すべきかとの基本的運用体制すら確立されていなかった。そのため、部隊編制の固定化は一年戦争終戦後となった。



カンキャンを編制し、含む場合、支援用MSの割合を増やす傾向が強い。



年戦争後、連邦軍は白兵戦用MS2機、支援用MS1機の小隊編制をとった。

## ■ホワイトベース隊(末期)

ア・バウラ戦後、第十二独立部隊として宇宙に上ったホワイトベース隊の編制。カンタンクは外され、カンキャンが2機体制に移行した。カンタンクが遊撃機的な運用となったため、カンキャンは互いに支援。あうりう、う。



RX-78-2  
ガンダム

RX-77  
ガンキャン



多目的戦闘機コア・アスターも2機体制に、カンタンクとの連携も度々実施している。

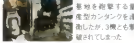
## ■第08MS小隊(ラサール工場基地戦)

連邦軍標準方面軍によるラサール工場基地攻略戦。通称「コマ大隊」の第08MS小隊は、量産型カンタンク3機の護衛任務を与えられ、白兵戦用MSのみで編制された部隊が、長距離支援用MSを派遣した例。一例であらう。



RX-75  
量産型ガンタンク

RX-79(G)  
特殊型ガンダム  
(改量産型)



基地を砲撃する量産型カンタンクを護衛したが、3機とも撃破された。

## ■サラブレッド隊

サラブレッド隊とは第16独立戦隊の編制。カンタンクタイプ2機とカンキャン3機という強力な陣容であった。カンタンク4.5号機の機動性に、追いつけないためカンキャンは同型機同士の連携や母艦の護衛を担当していた。



RX-78-5  
ガンダム5号機

RX-77  
ガンキャン



カンキャンは試作MS2機として生産数も多く、ホワイトベース隊以外でも運用されている。

## ■ホワイトベース隊(地上)

ホワイトベース隊が地上に降下した時点で決まった編制。支援用MSを組み込んだMS部隊としては史上初のものである。白兵戦用のカンタンクを、中距離支援用のカンキャンと長距離支援用のカンタンクをサポーターとして体制した。



支援用MSの有効性を証明したか、近接戦に巻き込まれやすいことも確認された。



RX-78-2  
ガンダム

RX-77  
ガンキャン

RX-75  
ガンタンク

## ■ワッケイン艦隊(ノモンダ特戦)

ノモンダ特戦時、ティターンズ艦隊、第3艦隊、ワッケイン艦隊に所属した、第1中隊と第2中隊の編制。小隊ごとに、編制が異なる。あうりう小隊同士によるサポートを想定したとみられる。第2小隊は支援能力重視の編制だった。



RGM-79 ジム  
(連長機・バスターカース)

RGC-80  
ジムキャン

RB-79  
ボール

## 第1中隊・第2小隊(ビーチマウンテン隊)

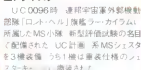


RGM-79 ジム  
(連長機・バスターカース)

RGC-80  
ジムキャン

RB-79  
ボール

## 第2中隊・第4小隊(リバーマウス隊)



RGM-79 ジム  
(連長機・バスターカース)

RGC-80  
ジムキャン

RB-79  
ボール

## ■トライスター

U.C.0096年時、連邦宇宙軍外部機動部隊「ロケット・ヘル」艦隊「ラー・カイルム」所属したMS小隊。新型評価試験の名目と配備された。UC計画「系MS」を3機装備。うち1機は量産仕様の「ネオスターキー」に改造された。



RGM-96X  
ジェスタ

RGM-96X  
ジェスタキャン

RGM-96X  
ジェスタ

RGM-96X  
ジェスタキャン

## ■機装による支援用MS化

ジェスタ・キャンのように白兵戦用(汎用)MSを支援・砲撃用に機装した機体も存在する。RGM-79CR シム改高機動型に中距離支援用ユニットを搭載した仕様。同様のユニットをYRMS-106 ハイザック先行量産型「量産仕様機」も対応に装備したRMS-106C ハイザック・キャンなどが該当する。



RGM-79CR  
ジム

RGM-79CR  
ジムキャン

RGM-79CR  
ジム

RGM-79CR  
ジムキャン

ギラードやギラードールは、量産用バスターカースと追加兵装の搭載に対応している。

## TECHNOLOGY INFO

### ■重撃用MS

長距離支援用MSに近い運用が可能なMS分類に重撃用MSがある。タンクタイプが大半の長距離支援用MSと異なり、二足歩行システムによる走破性と多用性をもつうえ、重撃用兵装の命中精度がきわめて高い。既存機の改修型の場合、総合性能向上型としての側面も有する。ただし、重撃用という特性上、パイロットを遠く機体とされているうえに高コストであるため、支援用MS以上に普及していない。



RMS-106CS  
ハイザック  
カスタム

MS-14JG  
ゲルクウ

ゲルクウの精密射撃専用タイプ。重撃専用として運用を想定された。

## TECHNOLOGY INFO

### ■機装による支援用MS化

ジェスタ・キャンのように白兵戦用(汎用)MSを支援・砲撃用に機装した機体も存在する。RGM-79CR シム改高機動型に中距離支援用ユニットを搭載した仕様。同様のユニットをYRMS-106 ハイザック先行量産型「量産仕様機」も対応に装備したRMS-106C ハイザック・キャンなどが該当する。



RGM-79CR  
ジム

RGM-79CR  
ジムキャン

RGM-79CR  
ジム

RGM-79CR  
ジムキャン

# GUNPLA Generation

ガンブラ ジェネレーション

vol.35

## RX-77 ガンキャノン

主役機ガンダムの随伴機ながら、なぜかいまひとつ影の薄い機体——それゆえに製品数も多くはない。それでもガンブラとしての進化は新製品リリースごとに確実に進んでいる点に注目してほしい。

### ガンダムでの反省が活かされたキット形態

最初に製品化されたガンキャノンは、1/144ではなく1/100スケールキットであった(1981年3月発売 価格700円・税別)。9ヶ月前に発売された1/100ガンダムがイマイチの中半端な内容であった旨を大いに反省し、胴体内の変形可能なコア・ファイターを取り外しても、ガンダムでは存在しなかった膝履の装甲でMS形態が維持できる仕様となった。

ちなみに1/144キット(1981年5月発売/価格300円・税別)は胴の内部にフレームパーツが組み込まれており、そこに左右分断式の各ブロックを推進していく方式が採用されていた。これは単なる偶然だとは思いますが、後年における1/100マスターグレードモデル—MGの構造と似た雰囲気を有していたことが今となっては非常に興味深いポイントである。



画像は未実装だが、旧1/100キットではオプションパーツが付属していたのが注目点となった。

1/144キットの脱関節は、連邦軍MSで初めて関節軸を採用していたことも大きなポイントといえよう。

アイテム数がやや少ないのが寂しいが、過不足なく進化を遂げたリニューアル化

**ガ**ンキャノンのリメイク化は、1/144 ハイグレードユニバーサルセンチュリー=HGUCの記念すべき第1作目としてリリースされることとなる(1999年5月発売/価格800円・税別)。ちなみにこの際、機体の形式番号がRX-77-2に改められた。最初期HGUCのため、今の視点ではところどころに詰めの甘さも見受けられるが、旧1/100キットにもオプションパーツとして付属していたスプレー・ミサイル・ランチャー(アニメ劇中には登



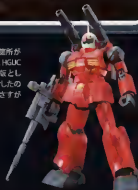
HGUC組女作として、関節部などに独自のアレンジを施す方向性付けが施されること。

場しなかったものの、大河原邦男氏による設定画が存在していた)を肩卸キャノン砲との選択式パーツとして付属させた演出は見事。さらに特筆すべきは、本キットから「ガンキャノンのデザイン画」に存在する、(脚アーマーを除く)脚の中央に存在する凹モールドをパーツ状態で再現した」ことであろう。これはデザイン画の忠実な表現に繋がっただけでなく、この箇所においてパテ埋め〜彫削消しという無用な作業



・HGUC以上に力強く骨太なシルエットを有するMG。もう18年前に発売された製品だが、バランスは良好だ。

長年待ち望んで多かったHGUCを、REVIVE版としてリメイクしたのがこの。さすがの完成度!



を強いてきた事実を消滅させた意義は非常に大きい。

素早い製品化された1/100 MG(2001年12月発売/価格3,000円・税別)では、劇場版映画「機動戦士ガンダムIII めぐりあい宇宙」の新機軸で追加された108号機と109号機のデカールが付属するとうれいまた惜しい演出をサービス(後年のガンダムファンには感涙の製品と化したはず)。また、変形式コア・ファイターとは別個のメカディテールを重視したコア・ブロックパーツが付属したうえ、背部バックパックや脚部装甲は着脱式で内部メカディテールも細密に再現されている。

そして現在における最新のガンキャノンのガンブラといえは、2015年8月に発売された1/144 HGUCのREVIVE版というところになる(価格1,200円・税別)。これはHGUC第1作目であった同キットに大規模リファインを加えた製品であり、各関節の幅広い可動を実現させ、アニメ劇中ながらの大胆なボージングを取ることを可能とした。低姿勢での射撃ポーズを可能とただけでなく、機体番号(108、109、203)のマーキングシールが付属しているのもうれしいプレゼントといえよう。

REVIVE版では、二馬関節の使用率によりこのような低姿勢での射撃ポーズも再現可能。



# NEXT MS

次号予告

ISSUE  
**36**

## お知らせ

諸般の事情により、ガンダム・モデル・ハイフルは、しばらくの間、隔週刊での発売にさせていただきます。次号 第36号の発売は2020年2月4日です。

## サイコ・ガンダム

ムラサメ研究所主導の下に完成した巨大可変MA。  
機体制御や武器管制にサイコミュを使っているが、  
システムが暴走する危険性をはらんでいる。

お買い得な価格で、発売日をメールでお知らせします！

**発売日お知らせメール**

<https://daogostini.jp/oshirase/gms/>

QRコード

QRコード

### ■ 超機雷ロボット

巨人、オフィス街に現る

### ■ MS機体解説

機体解説 武装解説

### ■ 関連MSラインナップ

サイコ・ガンダムと関連機体

### ■ MSパイロット

フォウ・ムラサメと周辺人物

### ■ MS戦記

サイコ・ガンダム 戦記の記録

### ■ MS進化論

サイコ・ガンダム 開発系諸国

### ■ メカニクス・シヤール

巨大可変MAの開発

拡散メガ粒子砲

強化人間

### ■ カンブラ シェネレーション

無骨なシルエットと  
重量感を忠実に再現！

第36号

2月4日(火)発売

定価：(本体639円)＋税

※各地域によって発売日が異なる場合があります  
※マガジンの内容が変更となる場合があります

全高40メートルもの巨体で迫り来る可変MAの能力を徹底検証！

ガンダムMSバイブル  
専用マガジンケース  
好評発売中!!

通常価格

1,230円

(創刊号)

定期購読とあわせてのご注文で送料無料!

※マガジンケース1冊に本誌の10号分を収納できます。

※何冊でもご購入いただけます。

巻頭に便利な  
ステッカー  
付き!



好評  
発売中

バック  
ナンバー  
ご案内



30 ZZガンダム



31 ガンダム試作3号機  
デンドロビウム



32 ダブルオーライザー



33 キャン



34 フルアーマー・  
ユニコンガンダム